

MITAKA HANANOKAI

地域に生きる ～どこで働き・どこで暮らし・誰が支えるか～

01

NEWS LETTER

三鷹はなの会



TOPICS ～目次～

新年のあいさつ

未来につなぐ～らしく STYLE を目指して～

グループホームの今 コロナ禍での支援

第三者評価を実施しました

研修報告

ぴゅあネット 障害者週間の取り組みについて

古典からこれからを考える

編集後記

春をいただく ～春盤～



「雨みぞれ 春や香り立つ 款冬華」

理事長 松崎 伸一



コロナに負けず 新しい未来へ

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、益々のご活躍を祈念いたします。本年は令和2回目のお正月となりました。十干十二支と言うと辛丑（かのとうし）の年になります。辛丑の年は、緩やかな衰退、痛みを伴う幕引きと、新たな命の息吹が互いを生かし合い、強め合うことになること。良き年となることを祈ります。振り返ると昨年は想像もできなかったコロナ禍に世界中が覆われた年となってしまいました。昨年のお正月には、新型コロナウイルスと言われても全くの他人事。パンデミックという言葉さえ知らず、すぐに普通に戻るものと思っていました。その後世界がどうなったかは皆さんご存知の通りです。

簡単には終息しそうなないコロナ禍。「ウィズコロナ」の時代。障害者施設にとっても、そこを利用する障害者の皆さんにとっても、常にウイルス感染を念頭

に置いた、窮屈で融通の利かない毎日となりましたが、もう今まで通りにはいかないことを受け入れざるを得ません。

全国の障害福祉施設では大規模なクラスター発生もたびたび報道されています。障害者とその家族に感染が発生すると、その衣食住、医療がどれだけ大変か、すでに起きた事例が教えています。三鷹市の障害者施設でも感染例が2つほどありますが、皆さんの努力があつてか大事にならずに済んでいます。

三鷹はなの会では感染者を出さないように、「ウィズコロナ」の時代に合う「新しい生活様式での事業運営」を進めていきたいと思えます。しばらくは窮屈な点もあると思いますが、皆さんのご理解をよろしくお願いいたします。

立春に一句読んでみました。

「雨みぞれ 春や香り立つ 款冬華」

先日思いがけず空はみぞれ模様となりました。冷たいみぞれが舞い落ち、春は

遠いと思えたその日、市内の畑の片隅に
露の臺（ふきのとう）を見つけました。

寒風が吹きみぞれが舞っても、時が来れば
露は必ず花径を伸ばし花を咲かせます。
款冬華（かんとうか）とは露の臺のこと
で食用になるのはその若い蕾。その独特
の香りが立つと春を予感させます。

今はコロナ禍でも私たちの努力と負け
ない心は、時を待てば必ず蕾となり、
香り立ち、春がやってくるはずです。
何事も慌てず、しっかりと前を見つめて
努力を積み重ねていきたいものです。

コロナ禍を超えて、新しい未来へ、皆
さんと共に、ゆつくりでも着実な歩みで
前に進んでいきたいと思えます。

本年もよろしくお願いいたします。



顔を合わせるという日々

事務局長 加藤 亮一

あけましておめでとうございます。旧
年中は格別のご高配を賜り、深く感謝申
し上げます。去年を振り返ると新型コロナ
ウイルス一色の一年でした。感染の波
に左右され、全く新しいもの変わって
しまった常識、生活様式の中で皆さん
色々思うことは多かったと思いますが、
1番は何でしたか？

移動や行動に制限が多い状況から、
テレワークやオンライン会議など時間や
場所に縛られない働き方、過ごし方が認
められ、直接会わなくても出来ることが
増えた1年と聞こえはいいのですが、ど
れだけ顔を会わせることが大切なのか、
あらためて感じた1年でありました。画
面越しに顔を見るのとは大きく違います。
相手が何を考えているのか、伝えたい
ことは何か、どんな気持ちなのかと、
表情やしぐさ、態度から伝わってくる、
言葉ではない声を感じるの、顔を会わ
せた時にしか出来ません。その声を互い

に感じ合える人を本当に大事にしようと
思いました。空気を共有して出来る上がる
雰囲気ありがたいことだと実感した
1年でした。

まだまだ新型コロナウイルス感染症の
影響は続くかと思いますが、会いたい人
の存在をあらためて大切に思い、顔を会
わせる喜びを楽しみに過ごしていきたい
と思います。本年もよろしくお願いいた
します。





未来につながる

スタイル

～らしくstyleを目指して～

日中活動支援部・相談支援部 統括責任者 須藤 恵

三鷹はなの会は、らしくの法人運営再移行（令和2年9月1日）により、下連雀HYビルの1・2階に生活介護事業所「連雀センターらしく」、3階に本部事務所と計画相談事業所「障がい者相談センターともに」を設置する形となりました。これにより、同一法人によるビル一棟管理と、より明確化した事業運営・管理体制の安定化を図ることが可能となりました。利用者・ご家族、関係機関の皆様にはご理解・ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

ここ数年、三鷹はなの会は、居住支援を中心に事業を展開しています。そして、令和元年6月1日には、生活支援を中心とした法人運営の相談支援機能として、計画相談事業所「障がい者相談センターともに」を立ち上げました。その相談支援事業「ともに」と連携を図りながら、法人内外で顕著となっている障がい者の高齢化・重度化に対応し、更なる利用者の安定した生活基盤を支える生活介護事業所として、「らしくstyle（スタイル）」を確立していきたいと思っています。

らしくの運営につきましては、その事業所名の通り、自分「らしく」が体現できる事業所を目指して、職員一同努めています。また生活介護事業所として、利用者の高齢化・重度化に対応可能な事業所を目指すには、個別プログラムの重要性が求められています。制作・創作・音楽・体操(機能訓練含む)などさまざまなプログラムを取り入れ、選択の幅を広げ、個々が望むまた適した活動を提供し、その意思決定を尊重していく。それが自分「らしく」を体現できる事業所作りにつながると、職員一丸となって、利用者支援のよりよい方向性を模索し、一貫性のある支援チーム作りを進めています。

個々にあった適切な支援の提供と人々とのコミュニケーションがその人「らしく」いられる場の提供につながる。そのため、職員一人一人の支援力向上を目指すことはもちろんのこと、人と人との関わりや絆を意識し、思いやりのある行動により、自分「らしく」が体現できるよう、そして笑顔あふれる繋がりとなるよう、利用者・ご家族、



関係機関の皆様と共によりよい事業所作りに取り組んで参りたいと思えます。

コロナ禍で人々との関りが少なくなりつつある昨今ですが、その繋がりに重きを置き続け、温かみのある事業所作りを目指して参ります。今後ともご協力の程、よろしく申し上げます。

生活介護事業所 連雀センターらしく

〒181-0013

東京都三鷹市下連雀 1-8-22 下連雀 HY ビル 1・2階

TEL 0422-24-0533 FAX 0422-24-0133

グループホームの

いま
今



「コロナ禍」での支援

居住支援部 主任 渡邊 操

新型コロナウイルス感染症により世の中が様変わりしてから1年が経過しようとしています。2回目の緊急事態宣言も発令され、先の見えない不安を抱え過ごす毎日ではありますが、ここで一度立ち止まり、今までの支援を考え直す機会を与えられたと、あらためてグループホームでの1年を振り返りたいと思います。

「感染を防ぐためにはソーシャルディスタンス：」。グループホームでの生活は基本、人との距離が近くなります。入浴、口腔ケアの介助にはじまり、どこで線引きをするのか本当に悩みました。そして、「新しい生活様式を：」に対応するため、日常の小さな変化にも反応してしまう人、外出する習慣を楽しむにしている人、人との距離感が近いがゆえに落ち着ける人と、それぞれの個性にどう対応し安定した生活を保ちながら切り替えていけるか、大変に悩みました。しかしふたを

開けてみれば、それらの心配は見事に空振りとなりました。

時間は掛かりながらも、今ではそれぞれのペース、それぞれの解釈で、今までとは違ったグループホームでの生活を受け入れ、新しいリズムを一人一人が創っています。そして、その創ったリズムを維持する強さも感じています。そう思うと、1番の不安要素は「支援者側の勝手な思い込みや決めつけなのではないか」とあらためて考えさせられました。



また、日中活動先の時間短縮等によりグループホームで過ごす時間が増えたことにより、今までになかった時間が生活の中に生まれたことで、利用されている方それぞれの新しい一面を見ることが出来たり、メンバー同士のコミュニケーション、雰囲気がいさらしく強くなつていく様子を確認出来たりと嬉しく思うことも多々ありました。そしてそれは当たり前のように9時から4時まで活動することが適切なのか、半日くらいが実は丁度良いのでは？と年齢、体力、障害特性からひとりひとりの日常の過ごし方を検討し、今までの固定観念とは違った考え方を持つことにも繋がりました。当たり前を疑い初心に帰る、その良い機会となりました。

「辛い時こそ笑っていきましょう。」そう思いながらこの仕事を続けてきましたが、まさに今がその時です。何気ない会話でグループホームのメンバーと笑いあっている時、「大丈夫、乗り越えられる！」と強く思うのです。コロナ終息後、全てのこと元通りに、とは思いませんが、以前のように皆さんと顔を合わせ楽しい時間を安心して共有できる日を心待ちにしながら、日々努めてまいりたいと思います。



三鷹はなの会 居住支援部事業

グループホーム・かのん
〒181-0004
三鷹市新川 3-21-9 はなはなテラス 2F
TEL/FAX 0422-24-7775

グループホーム・ピアいのかしら
〒181-0001
三鷹市井の頭 2-13-6
TEL/FAX 0422-49-6444

グループホーム・グリーンコート
〒181-0012
三鷹市上連雀 5-17-3
TEL/FAX 0422-47-9744

グループホーム・ハーベスト
〒181-0014
三鷹市野崎 1-6-11
TEL/FAX 0422-48-9555

一時保護 ピアえきまえ
〒181-0013
三鷹市下連雀 3-8-13
TEL/FAX 0422-43-0048

第三者評価を実施しました

生活介護事業所「らしく」

サービス管理責任者 竹田 かおる

令和二年度第三者評価を実施しました。

コロナ禍であったため、利用者の皆さんには十一月にアンケート形式での回答をいただき、第三者評価機関による訪問調査(アンケート集計結果と職員自己分析結果、事業所の報告書の確認)を年明けに行いました。

利用者・ご家族のアンケート結果は、全体的にらしくの活動をご理解いただけていることを感じ感謝すると共に、今後一層皆さんに満足していただける事業所にして行かなければと身の引き締まる思いになりました。また、現在コロナウィルスの影響で延期している家族会を次回行う際には、今後の法人や事業所の方向性等を改めてお伝えし、皆さまと情報共有していくことの大切さ、また必要性を感じました。



訪問調査でのお話の中で印象に残っているのは、「アットホーム」という言葉を何度か使って頂いたことです。今のらしくの雰囲気象徴している言葉なのだろうと思ひ、暖かい気持ちになりましたが、同時にアットホームに甘えてしまい、システム化していない部分も多くあるように感じました。システム化というと機械的に感じますが、支援が適切に行っているかチェックしたり振り返るに当たっては、その方法をシステム化することが有効で、間違いや漏れを防ぐことが出来ます。利用者の皆さんがアットホームな雰囲気の中で、今まで以上に自分『らしく』いられる支援をしていくには、チームで支援している以上、支援者の誰でもわかりやすく円滑に支援できるシステムも多く必要であること

を改めて感じました。もちろんシステムの先には、職員間の豊富なコミュニケーションが必要だと思います。今後も職員間、また利用者の皆さんとのコミュニケーションに重きを置きながら、一人一人の「自分らしく」を実現できる事業所を目指していきたいと思ひます。



グループホーム「グリーンコート」

居住支援部 主任 小林 和正

今回、三鷹はなの会共同生活援助事業として初めて東京都福祉サービス第三者評価実施させていただきました。評価対象は、グループホーム「グリーンコート」(ユニットとして、かのん・ハーベスト含む)です。

コロナ禍であり、アンケート形式という形ではありましたが、ご家族を含め利用者の皆様には貴重なお時間を頂きありがとうございました。

調査結果については、日々、私たちの支援について自問自答しながら支援員間で相談、アドバイスをを行っています。このような形で利用者の皆様から率直なご意見等いただくことで、事業について、大変理解、信頼をいただいている部分が多く感謝し、現在行っている支援についての自信、励みになりました。また改善点についても ご家族との更なる連携をはかる環境作りや情報の発信等明確になったことで、今まで以上に意識して業務に取り組みながら、更なる信頼をいただけるように努めていきたいと思えます。

事業については、法人やリーダー層の方々の理念・ビジョン・基本方針や一般職員の思

い等を再度確認する機会となりました。今後も三鷹はなの会の長所である年齢層が幅広く、それぞれの職員が意見を言いやすい風通しの良い職場作りを継続していきたいと思えます。

また、職員個々のスキルアップはもちろんのこと、利用者の高齢化に対する準備や衛生面含めた安心・安全に配慮した生活が出来る施設運営に向けて、その課題等と向き合っていきたいと思えます。

これからも利用者の皆様の貴重な時間に関わらせていただけるように、職員全員で協力し合いながら、一人一人の希望する人生を一緒に歩んでいければと思います。今後とも、ご理解・ご協力の程、よろしくお願い致します。



高齢知的障害者の方
を支援していく方法、
答えは1つではない。



高齢知的障害者に対する
支援とは？

一人一人の状況が異なるため、各関係機関が集まり「チームで支えあう」必要がある。そのため知的障害一人一人に合わせた専門の支援チームが必要である。その利用者、ご家族をよく理解している支援員が必要である。



研修報告

連雀センターらしく 主任 島村伸太郎

今後、成年後見制度の活用や相談支援事業所の仕組みを中核として包括的な見通しをもった支援を本人の意思決定を軸にして組み立て、継続していくことが必要である。

去る、令和2年10月16日に、三鷹はなの会常勤職員研修を実施しました。コロナ禍であり、密を避けるため、全体職員研修の実施は見合わせとなりましたが、法人内部研修として、新規職員との交流含め、顔を合わせる良い機会となりました。



第一部は、松崎理事長より、「三鷹はなの会のあゆみ」について講義形式でお話がありました。

1985年、三鷹市中心身障害者(児)親の会を母体として始まり、当時は養護学校卒業後に通うところもなく保護者の方たちが尽力して作り上げた作業所。現在は法や制度が成熟して、法人格を取得し、障害者総合支援法の下、それぞれが事業所となりましたが、保護者の方たちの「思い」を私たち職員は引き継いでいく必要があると、新規職員・在職職員共に、改めて意識した次第です。

第2部は事例検討会「高齢知的障害者に対する支援」という内容で、今まさに直面している課題を班ごとに分かれ検討・まとめ・発表し合いました。(検討し合った内容を吹き出しにまとめました。)

保護者の高齢化に伴い親亡き後の問題。保護者が元気なうちに今後に向けた手続きが必要である。具体的には次の保護者の決定。また、成年後見制度の運用。さまざまな資源を活用しつつ中心となるべきキーパーソンは後見人や相談支援事業所が担う必要がある。

ご本人の性格、素質、興味、環境等の良い部分を活かしていく。



日中活動については、個々の楽しみや生きがいを重視し、生活のあり方全体を少しずつ無理のないプログラムに変更していく必要がある。ご本人の状態に合わせた選択肢の提供が必要であり、支援のシフトチェンジが求められている。



現在直面している課題をそれぞれが再確認し、受け止め、次につなげていくための有意義な検討会となりました。今後さらに高齢化が進んでいくなかで、ご本人、ご家族、関係機関と常に連携を取り合い「情報の共有、課題の共有」が必要であると思われます。利用者一人一人に寄り添い、本人が望む場所で、望むかたちでの生活。誰と暮らし、どのように暮らすか。この実現に向け私たち支援員が果たすべき役割は大きいと感じています。

直近の課題について担当部署が異なる職員と意見を交わし、啓発しあえたことで視野が広がる、学びの多い研修会となりました。今後の支援に活かせるよう、努めていきたいと思ひます。

ぴゅあ ネット

～三鷹の街に暮らして～



障害者週間(12月3日～9日)のイベントとして
作品展『もっと知ってほしい! 障がい者のこと』が
開催されました



障害者週間の取り組みについて

星と風のカフェ 店長 吉川 十志子





ぴゅあネット事業

星と風のカフェ

〒181-0013

東京都三鷹市下連雀 3-8-13 1F

TEL/FAX 0422-44-2255

<https://hanano-kai.jp/hoshi-cafe/>



星と風のカフェ



本会場となったのは三鷹市図書館本館。入口を入ったすぐ目の前に展示スペースが設けられ、開催期間中は、色鮮やかで表現力豊かな作品の数々が来館者を出迎えました。作品と共に、障がい者についての啓発ポスターや「星と風のカフェ」の紹介、ヘルプマークの紹介の他、ぴゅあネット事業各所の取り組みについてのポスターも掲示され、ポスターには各所より提供いただいた自主製品や作業風景の写真、紹介文を掲載。事業所を利用する方たちの日々の活動のアピールの場となりました。

また、星と風のカフェでは、作品展『みたかの星めぐり』を開催。店内に所狭しと飾られた迫力ある作品に、来店客だけでなく、歩道を歩く通行人までもがガラス越しに足を止めていました。

来客の皆様より作品展に対する嬉しいお言葉をたくさんいただきました。図書館の会場に設置されたアンケートにも、温かいお言葉や感動の声が寄せられ、多くの関心を集めた作品展は、大好評のうちに終了しました。

「この子らを世の光に」

古典から これからの考える

事務局長 加藤 亮一



～Select Book～

糸賀一雄著 『福祉の思想』



私が、障害福祉に携わり10年が経とうとしています。理想通りにはなかなか
いかない福祉の世界。悩み、煮詰まり、行き詰る度、私は糸賀一雄著『福祉の思想』
を読み返します。新型コロナウイルスにより世間の道德観さえ揺らいだ2020年。
障がいをかかえた人にとっても、家族、私たち支援者にとっても、生活が大きく変わ
った2020年、もちろん再読しました。

障害者福祉の父といわれる糸賀氏の思
いが溢れた有名な言葉は「この子らを世
の光に」。『福祉の思想』初版は1968
年、50年以上前に書かれたこの本から
は障害福祉政策の歴史がよくわかります。
差別、偏見、哀れみ、保護、恩恵などの
課題、問題意識からどのような思いで制
度、法律へと運ばねばならないか、その
考え、行動はある程度整った現在の福祉
環境の中にいる私には想像できるもので
はありません。同時に社会情勢は大きく
変わっているにも関わらず、知的障害福
祉分野の課題、問題意識が今でも克服で
きず、50年前と変わらない現状である
ことにも気づかされます。

パンデミックにおいて1番恐ろしいの
はウイルスではなく人間の無理解である。
そのことを100年前のスペイン風邪で
人類は学んだはずなのですが、科学技術
が発展した現代においても感染を克服す
ることはできません。同じように知的障
害福祉において課題が克服できないのは、
問題が障害そのものではなく当事者以外

の社会の無理解であり、制度、政策が整いつつ50年、時間を費やしても解決できないのだと解釈させられます。

現場の草分け的存在、実践的活動を通して糸賀氏の福祉的人間観に自分がついていけているのか、その都度自問自答します。数々の事例においても氏の心からの思い、問いに圧倒させられるばかりです。福祉の仕事に出会うには「自分は少々歳を取り過ぎていたのでは」という言い訳に邪魔されながらも、自問自答し、圧倒され、私は毎回自分の覚悟を確認させられるのです。

「いくなれば自覚者が責任者である」。障害を抱えた人、家族に対する意識、この仕事への携わり方、現場での支援、法人の運営、自治体でのあり方と、今までの歩み方に自分の自覚と責任、覚悟を照らし合わせ省察します。そして「確信を実践的に発展させ反省によって捉まえなおす」という氏の思いに都合よく背中を押されるのです。覚悟を備えない確信はあり得ないのだと、これからの歩み方

を説かれるのです。

当時の日本障害福祉の状況と理解を糸賀氏は「夜明け前」と言いましたが、未だなお夜は明けていないように思われます。変わらない社会の不幸を何かのせいにしている場合でも、足りない自分の覚悟に悶々としている場合でもありません。氏の思想に学びつつ、その理念と実践を微力ながら発展させ、氏の言う光が社会指標となるよう努めたいと思います。これからの10年、あと何回読むことになるのか。昭和、平成と時代が変わるだけでなくウイルスとの共存を余儀なくされた令和の社会において読む機会が増えることが想像されます。読み続ける情熱を保ち、**この古典ともいわれる1冊**とともに歩んでいきたいと思えます。最後に『福祉の思想』から何度も読み返している一文で締めくくらせて頂きます。「彼らにたいして、また彼らのために何をしてやったかということが問われるのではなく、彼らとともにどういう生きかたをしたかが問われてくる」。

【編集後記】 hennsyuukouki

節分の日の朝、バスに乗って、下連雀のバス停で降りるはずが…、なんと杏林大学杏林キャンパス直行便！校舎の中まで行ってしまいました。大学校舎に入るのは本当に久しぶりでした。少し歩いたら春に咲く花のつぼみを見つけましたよ。間違えることで見つかる幸せもありますね。三鷹はなの会、令和初めての通信紙を皆さんにお届けしました。いろんな行事・イベントを開催できなかったこの一年間。私たちとしても事業運営を再検討する大きな一年となりました。伝えたい気持ちを言葉にして、この一冊をお届けできたこと、本当に嬉しく思います。

本部事務局 李 艶

2020.09 辞令交付式





李さんの
ちょこっと
レシピ

春をいただく “春盤”



1月30日(土)の今日は休日モード全開！平日はバタバタ過ごしているので、休日はのんびりと過ごしたいなあと、朝ご飯はもちろん、お昼ご飯ものんびり。そして、夜はやはり特別なものも食べたいものです。2月3日は立春、少し早いですが「中華風クレープにしよう」と準備です！

立春は中国では咬春（ヤオチュン、春を食べる）「春餅（チュンピン）」を食べる習慣があります。生野菜を薄餅（バオビン。小麦粉を練って薄く延ばして焼いたもの。北京ダックを食べる時のあの薄餅皮より、やわらかくモチモチしていて、“荷葉餅”（ハスの葉の形の“餅”（ビン））と言います。）で巻いたもので、材料はごくシンプル。生地はラップして30分以上休ませるだけでOK。生野菜の細切りを並べたひと皿を“春盤”、「春のプレート」と言い、これらを食べることで咬春迎新、パワーをもらい、厳しい冬はもう過ぎ去り、春がまたやって来たことをあらわします。

2021年の立春の瞬間は、2月3日23時59分。
2月3日になるのは、124年ぶりだそうです。
らしくのみなさんと、豆まき参戦しよう～。
疫病退散の願いを掛けて、「おには一、外！」
しっかりと追い出して、新しい気持ちで、
春を迎えたいと思います。（李）



MITAKA
HANANOKAI

01
NEWS LETTER

2021年(令和3年)2月5日発行

【編集・発行】NPO 法人三鷹はなの会 本部事務局



〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 1-8-22

下連雀 HY ビル 3F

TEL 0422-24-8408 FAX 0422-24-8409

【責任編集者】松崎 伸一